



[今月の聖書]

C1807 『神の時を待て』

「わたしは耐え忍んで主を待ち望んだ。主は耳を傾けて、わたしの叫びを聞かれた。主はわたしを滅びの穴から、泥の沼から引きあげて、わたしの足を岩の上におき、わたしの歩みをたしかにされた。主は新しい歌をわたしの口に授け、われらの神にささげるさんびの歌を／わたしの口に授けられた。多くの人はこれを見て恐れ、かつ主に信頼するであろう。」(詩編 40:1-3)

「わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。神を待ち望め。わたしはなおわが助け、わが神なる主をほめたたえるであろう。昼には、主はそのいつくしみをほどこし、夜には、その歌すなわちわがいのちの神にささげる／祈がわたしと共にある。わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。神を待ち望め。わたしはなおわが助け、わが神なる主をほめたたえるであろう。」

(詩編 42:5, 8, 11)

神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。「もうしばらくすれば、／きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、／わたしのたましいはこれを喜ばない」。しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である。(ヘブル 10:36-39)

この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそれれば待っておれ。それは必ず臨む。滞りはしない。見よ、その魂の正しくない者は衰える。しかし義人はその信仰によって生きる。

(ハバクク 2:3, 4)

お元気でお過ごしでしょうか。梅雨も明けて夏が到来しましたね。今月のテーマは「神の時を待て」です。レイモンド・エドマン博士の「人生の訓練」では「遅延における訓練」となっているテーマです。「あなた方に必要なのは、忍耐である。」(ヘブル 10:36) 神が失望をもたらされる時、それには理由があり、神が物事を遅らせなされる時も、神が拒絶されたことを意味するのではない。しかし私たちはそう信じているだろうか。遅延は人の希望を無残にも破壊してしまうものであるが、主イエスに仕えようとする者にとっては、またとないよい訓練となる。すなわち「待ち望む訓練」である。私たちは無意識に自分の計画で動いている。それがうまくいかないと、必死に祈り、なぜ神は聞いてくださらないのかと不平を言う。しかし、神の時を伺わず、またみこころを思い巡らすことをしなかったことは考えない。そこで、計画通りに行かない時、「待ち望む」ことによって神を信頼し、逆境においても失望しないより高い霊的経験に引き上げられるのである。

旧約聖書では、アブラハム、ヨセフ、モーセ、子を求めたハンナ、そして新約聖書では主イエスでさえも長い沈黙の待ち時間を過ごした。ペンテコステを待ち望んだ弟子達、そして再臨を待ち望む私たちも。詩編の記者ダビデは繰り返し「主を待ち望め」と自分に言い聞かせている。それは同時に私たちへのメッセージである。そこに忍耐の祈りがあり、信仰によって生きる道がある。この学びがあなたの人生の大切な成長をもたらしますように祈ります。

(お知らせ)

* 地区集会のご案内

7月10日(火) 13:00 CFI 横浜集会 (福音喫茶メリー Tel 045-231-6773)

7月18日(水) 11:00 CFI 賛美の集い (自由が丘チャペル)、14:00 ジョイコーラス

* 7月19日(木) 11:00-17:00 バイブルアカデミー (自由が丘チャペル、受講料1回3000円)

* 7月11日(水) 19:00 東日本大震災復興支援超教派一致祈祷会 (淀橋教会)

* 9月1日(土) 13:30 「オラトリオ・メサイア 2018 紀尾井ホール」(防災の日)新体制でチャリティーコンサートを継続する事になりました。ヘンデルも「メサイア」によってキリストを証し、孤児たちを支援することによって音楽家として神に用いられました。

「ブラジルからの祈りに支えられて」

山田君子(山梨県)



今年 71 歳になります(現在 83 歳)私は生けるキリストに 40 年前にお会いしなかったら、現在生きてはいなかったと思います。

昭和 33 年秋、私の第一子が生まれた頃、英雄兄はブラジルに移民し、その後キリスト信仰に導かれました。以来日本の親兄弟(兄弟は日本に 7 人)によく手紙が来るようになりました。そのすべてがキリストに出会えた喜び、感謝に満ち溢れ、その大切さを語り奨める内容ばかりでした。

しかし、5 年程たちましても、誰一人福音を求める者はありませんでした。キリスト教は外国の宗教で、日本の社会を乱す嫌われものと言う観念がありました。その 5 年間に私は一男二女を授かりましたが、家風、習慣の異なる家に嫁いだ嫁として、心が貧しく、戸惑いや不満、湧き上がる悩みや身勝手な感情に満たされていました。英雄兄の手紙を読むたびに、兄のような心になりたい

と思いました。しかし、日本の農家の嫁には叶わぬことと諦めて、不安な日々を過ごしていました。

物心ついて 以来、毎年秋の終わりから師走に入ると気分が暗くなりました。二度とない人生なのに、暮らしに追われて働かねばならない。私は何のために生きているのだろうか…人間らしく生きる道がどこかにないのだろうか。そんな虚しい思いに苦しみました。

長男が小学校に入学する年、元旦の未明、実家の兄嫁が、11 歳を頭に三人の子供を残して急死しました。思い起こせば、兄の手紙に幾度も、実家に迫る試練を忠告され、姉が「早くキリストを受け入れて下さるように奨めて欲しい」と言われていました。しかし、自分が信じていない神を姉に奨めることはできません。取り返しのつかない予言された義姉の死は、私を揺さぶり、震える心でその手紙を読み返しました。

この世には目には見えずとも、全知全能の愛の神が、キリストを通して実在することを知りました。その後の手紙に、「神は信ずる者には、例え試練がのぞんでも、試練の前より後を必ずよくして下さる」とみことばを示し、更に「あなたがよそ事だと思っているとあなたの上にもやがて試練は訪れます」と云うただならぬ予言に、ついに私は隠れキリシタンのようなものではあるが、イエス様にすがり、助けていただく決心をしました。

やがて 3 月に急性腎臓炎という重病になりました。医師からは絶対安静を言い渡され、治っても、二年以内に再発したら、せいぜい 50 歳位までの寿命だと言われました。姑と主人は幼児三人の世話と私の看病とを一生懸命やってくれました。少しずつ快方に向かう病床で、100 円で求めました新約聖書文庫を読み始め驚きました。今まで聞いたこともない、みことばの真理と恵みを示されました。キリストの導きは思い煩いの多い私に、「神の国と義を求めなさい。そうすればこれらのものは、みな加えて与えられる。だから明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自ら思い悩むであろう。その日の苦労はその日一日で十分である…」次々と心に沁みいるみことばに、慰め、安らぎを受けました。特に喜びをいただいたみことばは、「何でも私の名によって祈り求めなさい。父が子によって栄光をお受けになるためある。」早速このお約束を信じ、一日も早い快復を祈り続けました。また家族の救いのためにも祈りました。日毎癒されて行く実感の有り難さに、最早隠れキリシタンでは居られなくなりつつありました。…(来月に続く)

*この証は、2006 年に書かれ、2017 年 10 月受領したお手紙の中にあつた手書き文の要約です。